

## 『子どもの最善の利益』を医学生とともに考える

琉球大学病院 周産母子センター  
吉田朝秀

小児に関わる保健、医療、福祉、行政、教育において最も大切な原則は『子どもの最善の利益』を追求することだと思います。私は臨床医、大学教員として周産期新生児学を担当しておりますが、年に一度医学生とともにこの言葉について深く考える機会を与えられています。琉球大学医学部の臨床倫理討論会は臨床倫理学の金城隆展先生とともに、各科の指導医が分担して様々なテーマについて討論し、理解を深める学びの機会です。生命倫理や死生学、先進医療、告知の問題や緩和医療などの問題は、答えが見つからないことばかりですが、医学生は事例について活発な討論をおこない理解を深めています。

ある年、私は小児臨床倫理の事例として帝王切開を選択するべきか母親が悩んでいる場面を提示しました。お腹の子どもは重度障害を持つと説明されており、近日中に帝王切開をおこなわないと児の生命が危ぶまれる。しかし父親を含む家族は、帝王切開をせずに子どもを諦めさせようとしているという難しい設定です。事前学習において医学生の一人が、子どもの予後は不良なのだから、母親の安全と家族の判断を重くみるべきで、母親には手術を避ける権利と、家族が母親を思う気持ちには道理があると主張します。私はうなずいて「胎児には法的、社会的に人権はないし正しい選択かもしれない。でも、母親は自分をずっと責めるかもしれないね。」と伝えます。ある医学生は、胎児は生まれた瞬間に人間になるのだから蘇生処置をすべきであり、少し強引にでも帝王切開を勧めて児の安全を高めるべきだと主張します。私は「周産期センターで働く医療者としてはその方向性は当然ですね。でも、強くオススメした帝王切開のあと、母親や家族が子どもに寄り添えず、だれも面会にこなかったらこの子は幸せなのかな。」と伝えて一緒に考え込むのです。また、母親だけが真の当事者なのだから、その意見を最大限に尊重する他ないと訴える医学生に対しては、「その通りだけど親権は父親にもあるよね。父親の意見を無視すると大問題になるかもしれないよ。」と伝えて深刻そうな顔をしてみせます。そして、「子どもの蘇生は本人の同意が得られないけど？」などと言ってさらに医学生を困惑させるのです。

このようなやり取りのうちに、医学生は子どもにもあるはずの心身の主体としての決定権が見落とされる場面、子どもを愛するゆえに迷う母親や、その負担を心配する家族の気持ちが時に子どもの利益に相反してしまう場面を体験します。教員としては、医学生に『言葉のない子どもたちは、自分の利益を他人の利益や不利益に影響されて決定されかねない』という現実を理解してもらうことが目標なのです。

討論会の当日に、この難しい局面の説明と討論ののちに『子どもの最善の利益』を追求する周産期医療者の寸劇が披露されました。医学生の演ずる医療者たちは、多職種の支援を仰ぎながら母親や家族の心理を読み、子どもの想いを代弁し正しく医療を施しました。そして予後不良とされたこの子どもは『倫理的な危機』を母親や家族とともに乗り越えて、ついに『子どもの最善の利益』を実現したのです。もちろん医学生は全員が小児科医になるわけではありません。しかし、医学生の心のなかで『子どもの最善の利益』を第一に考えることの難しさや大切さが理解されれば、素晴らしいことだと思います。

私が倫理討論会のお世話をするのは年に一回ですが、また次の学年の医学生とともに医療現場の倫理的問題の厳しさと深さを体験しつつ、ともに解決策を探るのを楽しみにしています。

令和2年12月24日